

地域に根ざした課題解決活動を用いた社会科授業づくり

— 小学校における社会科授業構成研究 (2) —

金 寶美・福井 駿・池野範男

(2013年10月3日受理)

The Strategy for Teaching and Learning Social Studies Using Problem-Solving Model:
A Study on Construction of the Unit in Primary Social Studies

Bo-Mi Kim, Suguru Fukui and Norio Ikeno

Abstract: The aim of this paper is to pick up three primary schools as representatives of studying the construction of social studies lessons by school teachers, to analyze a view of social studies education, the unit of primary social studies and a lesson and to abstract the principles from the unit and its lesson. In this research we analyze the unit and its lesson of social studies in three primary schools; Akebono primary school in Fukuyama city, Hiroshima prefecture, Michinoue primary school in Fukuyama city, and Akasaka primary school in Fukuoka city, Fukuoka prefecture. Following the first paper about Akebono primary school, in this paper we take up the social studies in Michinoue primary school using problem-solving model.

Key words: Primary School, Social Studies, Strategy for Teaching and Learning Problem Solving Model, Steps of Probing

キーワード：小学校 社会科、授業づくり、課題解決学習、つきつめるのステップ

0 本連続稿の問題の所在

本研究は、小学校教育現場における社会科授業構成の調査研究である。学校教育現場における社会科授業づくりの研究は、残念ながら、大学研究者、各個人の実践者の社会科授業構成研究ほど、進展していない。静岡市立安東小学校のような研究は稀で、貴重なものである（上田・静岡市立安東小学校、1988、武藤、1989）。本研究は、池野が関わってきた小学校の中で、特筆できる3校を取り上げ、各学校の社会科教育観、代表的な単元計画や本時指導案を分析し検討することで、それぞれの小学校における社会科授業構成の理論と課題を究明することを目的とする。

そのため、昨年度の本研究（池野・金・福井、2012）では、地域教材を取り入れ、子どもたちにとって身近

な学習材にすることで、学習に刺激を与え活発にするようにしている広島県福山市立曙小学校の事例を取り上げた。当校では社会科授業づくりに知識の構造図を持ち込み、1つの単元の内容を構造化し、より高いレベルの学習になるように努めていた。これは、情報や事実の羅列、あるいは、その暗記・早期の学習を進め、教育目標の達成が難しくなってしまうという教育状況を認識し、その改善を図り、教育課題の解決のため、3つの基本方略を設定していた。

第一は、より高い知識を学習できるように、知識の構造図を作成することである。第二は、質の高い知識の学習を意識するために、社会の見方や考え方を設定することである。第三は、高い質へ子どもたちの学習が移ることを集団思考の活用によって保障しようとしていることである。これらの点をうまく利用して、曙

小学校において社会科授業づくりを進めている。

基本方略が十分働いているかと言えば、そうとは言えない。知識の構造図の書き方、またその活用の仕方に問題を抱えている。もちろん、地域教材・知識の構造図を用いて、質の高い社会科授業づくりを進めていることは評価すべきことである。

小学校社会科授業構成に関する第二の研究対象校として取り上げるのは、(旧神辺町立)現福山市立道上小学校である。前回に取り上げた曙小学校の場合、知識の構造図を活用し、教育内容の構造化を図るものであった。それに比べ、本稿で取り扱われる道上小学校は、教育内容よりも、教育方法の構造化に重点をおいているものである。

なお、本稿で道上小学校の社会科授業づくりとして取り上げるのは、社会科教育の研究を主に進めていた1991(平成3)–2002(平成14)年のあいだで、池野が関わっていた時期の研究である。

1 研究対象校、道上小学校の特徴

(1) 福山市立道上小学校の子どもの特質と課題

道上小学校の子どもたちは、元気で明るく、真面目に物事に取り組み、くらしの中での問題に気づき、自らの力で解決していこうとする姿が見られる。しかし、その一方で、主体的に活動に取り組んだり、事象を多面的にとらえ、筋道を立てて考えたりすることが十分にできない実態がある。また、自分の思いや考えを相手にわかりやすく表現することは十分に育っていない。

地域の人々の学校に対する関心や期待も大きく、学校教育はもとより、家庭教育・社会教育にも熱心である。

道上小学校では、国際化・情報化及び青少年問題の多発など、今日の激しい社会変化に適切に対応できる「生きる力」の育成に向け、一人ひとりの子どもが内に秘めている良さや可能性を伸ばすために、自ら学ぶ意識をもち、課題解決学習による「生きる力」を育てることを教育課題として、保護者・地域社会との連携を図りながら、地域に根づき、開かれた学校教育の確立をめざしている。

当校では、教育活動のすべてを見つめ直し、次の3点を課題として具体的な研究に取り組んでいる(道上小学校, 1991, 1992, 2002)。

①「個性的思考」を基盤とする教育の重視(画一性の排除): 子ども一人ひとりの考え方や見方を出させ、スタートにおき、これをみんなで吟味し、集団で高めていく能力の育成

②生涯学習の一環としての「自己教育力」の育成の重視(抽象や観念の排除): 課題解決学習を重視するなかで、自らを教育していく能力の育成

③広い視野から多面的・多角的に判断できる能力の育成(固定観念の排除): 社会の変化に対して、柔軟に、かつ適切に対応できる能力の育成

以上の取り組みは、主に「生活科・社会科教育」「道徳教育」「総合的な学習」を基にして、子どもたちの「内面性」と「実践性」を育てることを目的にして進めていた。実践性を育てるには、体験の場の創造・工夫に努め、教科ごとの内容と特別活動の関連を通じて、内面性との相互補完を明確にすることを図る。それに比べ、子どもの内面性を育てるに関しては、各学年群の授業過程における「つきつめる」のステップで工夫を進めていた。

授業の基本的な学習過程を、実態把握・事象提示、課題設定、予想する、つきつめる、まとめる、の5段階で構成している((道上小学校, 1991, 1992, 2002))。

そのうちの、つきつめるのステップがもっとも重要で、重要視されている。そのステップは「追究」とも別称され、予想に対する根拠を話し合う、具体的な資料で説明する、集団思考により、自分の考えの足りなさに気づき、考えを深める、ことを行うものである。

本研究ではその特質を念頭において、道上小学校における社会科教育研究の取り組みを紹介し、その基本原理と課題を明らかにしたい。

(2) 中学年社会科の取り組み

道上小学校は学年群ごと(低・中・高)に研究テーマを決め、それを基に授業研究を進めている。勿論、それは社会科に限るものではないが、道上小学校の教育基盤になる考えであるため、本稿では第3・4学年の授業を取り上げる。

中学年の研究テーマは「自ら課題をもって調べ、進んで地域・社会にかかわろうとする子ども」である。このテーマ設定の理由に対しては「中学年の子どもは、見学・調査活動に対して興味・関心を持って意欲的に入り込み、その中で様々なことを感じたり、疑問を持ったたりすることができる。しかし、その発言は調べた事実だけにとどまったり、自分のこれまでの体験を語るだけに終わってしまったりしがちである」と述べている(道上小学校, 1991)。

当校は、それに関して3つの仮設(研究の重点)を立てている(道上小学校, 1991, 1992, 2002)。

①目的を明確にした見学・調査活動をすれば、課題を解決していくための段階的なステップを意識した継続的な追究活動ができるであろう。

②見学・調査活動から得た情報や資料を活用できる

授業を仕組めば、考えをより深めることができるであろう。

- ③以上の①と②の学習過程を経ることをすれば、1つの調査活動から発見できる事象が増え、課題解決のために必要な見学・調査活動がより主体的にでき、新たな課題発見にもつながるであろう。

確かに、課題を明確にした調査活動を行う中で、自分の考えをもち、確かめることは大切である。そのことが課題に対する根拠を発見し、新たな疑問（課題）へと発展していくことになるからである。さらには、お互いに見つけたこと、感じたこと、疑問に思うことなどを学級全体の場に出し合い、分類したり、整理したりする中で自分の考えとクラスの子どもの考えの違いに気づいていくようになる。そして、その違いについてお互いの考えを聞き合い、考えあう中で事象の持つ意味へより深くせまることができるようになる。

（3）「つきつめる」のステップ

道上小学校では、以上の研究テーマを追究するための具体的な手立てを研究している。それは、社会科をはじめ、生活科・総合的な学習の時間を通じて子どもたちが身に着けることを強調している4つの能力と関係が深い。4つの能力とは次のものである。

- ①問題をとらえる力：事象や事象相互の関連から、自己の解決すべき問題をとらえる力
- ②観察・表現する力：事象、ことがら、見学・体験したことなどをありのままにとらえ、自分なりに表現する力
- ③資料を活用する力：仮説を検証するために資料を収集し、見学・体験により分かりやすくまとめたり、必要なものを選択しながら生かせる力
- ④まとめる・表現する力：問題解決の過程で抽象化する力

以上には「表現する力」という表現が2回で出てくるが、意味的な違いがある。②の「表現する力」は、自己の問題把握にもとづいて、収集した資料をノート等に整理するという第1段階のまとめる力ととらえている。それに比べて④の「表現する力」は、課題に沿ったまとめから一般化するとともに、相手意識をもって、思想の筋道が分かるように伝達する力ととらえている。

これらの能力が具体的な学習場面で子どもたちに求められるように工夫したのが、授業過程における「つきつめる」のステップである。

道上小学校では、子どもたちがその段階に応じて社会科・生活科の時間に、具体的な活動や「ひとり調べ」によって整理した「予想」の根拠や気づきを出会う中で、どの事象を対比させることが有効なのか、またそ

の具体的な手だて（「有効な資料提示」、「切り返し」発問や「ゆさぶり」発問など）を研究する。

本稿では、第3学年と第4学年の単元を事例にして、社会科授業内容と方法の構造化を図る道上小学校の授業構成研究とはどのようなものか、またその原理や特徴、課題はどのようなものかを追究したい。

2 第3学年単元「わたしたちのくらしとはたらく人々—私たちのくらしと商店」の場合：2組の授業を事例に

（1）単元のねらいと課題

3年単元「わたしたちのくらしとはたらく人々—私たちのくらしと商店」（道上小学校、1991）は、（平成元（1989）年版）学習指導要領の中で「地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする」という目標に関わって、計画されている。そのため、スーパーマーケット、コンビニエンスストア、小売店などの子どもたちの生活と深く関わりのある商店を取り上げている。

ほとんどの子どもたちは、日常的に学区内の商店でおやつを買ったり、家族と一緒に買い物に行ったりしている。しかし、家の人とはどのような考えで品物や店を選んでいるか、商売のために店ではどのような工夫をしているかに関しては、あまりにも考えていない。

それ故、本単元の指導にあたっては、買い物についての聞き取り調査やスーパーマーケット・商店の見学、働く人へのインタビューなど体験的な活動を取り入れ、販売する側の工夫や努力、更に品物を買う側である消費者の要求や願いなど、自分や家族の生活と結びつけながら考えさせようとしている。このような意図は、単元の評価規準を見ればもっとはっきり表れる（下表1、参照）。

表1 評価規準

関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> □地域の人々の生産や販売の仕事に関心を持ち、意欲的に調べ、考えながら追究している。 □地域の生産や販売の仕事の理解に基づいて、地域の人々の仕事について関心を深める。
思考・判断	<ul style="list-style-type: none"> □地域の人々の生産や販売の仕事について問題意識をもち、学習の見直しをもって追究・解決している。 □調べたことをもとに、地域の生産や販売の仕事に携わっている人々の工夫について考え、適切に判断している。

技能・表現	□地域の人々の生産や販売の様子を的確に見学したり調べたりしている。 □地域の人々の生産や販売に見られる仕事の特色や国内の他地域などのかかわりを、見学や調査して具体的に調べている。 □見学、調査した過程や結果を分かりやすく表現している。
知識・理解	□地域には生産や販売に関する仕事があり、それらは自分たちの生活を支えていることが分かっている。 □地域の人々の生産や販売に見られる仕事の特徴が分かっている。 □地域の人々の生産や販売に見られる国内の他地域などのかかわりが分かっている。

(2) 単元の計画とその構造

本単元では、子どもたちの日常生活と密接な関係である‘スーパーマーケット・コンビニエンスストア’を取り上げ、学習を進めるように計画を立てている(資料1：単元計画、参照)。

単元(全16時間)は、①導入(家族の買い物について調べ、1～2/16)→②スーパーマーケット(見学・観察・インタビュー・調査を通して気づく、3～9/16)→③商店街調べ(コンビニエンスストアの調査・商店街見学、10～14/16)→④まとめる(買い物の工夫調べ、15～16/16)と構成されている。

①導入では、家族の買い物について調べる活動を通して学習主題に対する子どもたちの興味や関心を鼓吹する。②スーパーマーケットは、買い物調べから自分たちの消費生活に関心を持ち、店や商店などの調査活動を通して、店の特徴や販売の工夫をつかむとともに、価格や品質、サービス、安全性などを考え、店や品物を選ぶ消費者の買い物の工夫について考えるように構成されている。③商店街調べは品物の仕入れ先を調べる活動から、自分たちの地域が広く国内の他地域だけでなく、外国ともかかわりあっていることに気づくことができるように構成されている。

2組の子どもたちは、すでに「わたしたちの町の様子」で、道上学区の様子を調べ、地図づくりを行った。その際、学区内には大きな商店街はないが、国道182号や国道486号線沿いには、様々な商店が建ち並んでいることを知っており、国道沿いに商店が集中している理由を考える機会もあった。

しかし、店でどのような工夫をしているかに関しては考えずじまいだったので、本単元では自分たちの生活との深い関わりを考えさせるため買い物の経験やスーパーマーケットの見学を取り入れている。家族の買い物に関する経験を話し合うことを通じて、子どもたちは調査活動への意欲、疑問を持ったり関心をわかせたりして、授業に積極的に参加するようになる。

その過程で、子どもたちは同じ品物でも買う店によって価格が違うという事実から疑問をもち、それを解決するためにスーパーマーケットを見学する。見学の準備過程では、自分たちの疑問を解決するための調査の内容と方法に関してクラス内でいろいろと話し合いをする。見学の経験はもちろん、その準備段階のコミュニケーションを通じて、子どもたちは自分の思考をもっと広げることができる。

このような構成は具体的な学習計画と同時に、子どもの理解や認識の構造化を示すものでもある。しかし、単元内容は比較的簡単な構造にまとめられている。知識の構造図のように、詳細なものではなく、各教師が進める学習内容を整理したものといえよう。それは、道上小学校が授業における課題を追究するために用いている具体的な手立てである「つきつめるのステップ」と関係が深い。

‘単元内容の構造化’は単純であるが、そのような内容構造の単純性は授業段階における‘構造化された授業方法’と合わせてなされ、実践的な指導計画として作成されている。「つきつめる」のステップは‘ひとり調べ、予想、有効な資料提示、繰り返し発問、ゆさぶり発問’で構成されている。

具体的な指導計画を事例にして、授業過程における「つきつめる」のステップがどのように進むのかを検討したい。

(3) 本時の指導計画(11/16)：「つきつめる」のステップとその役割を中心に

道上小学校の場合でも、資料1のように、ある程度構造化された指導計画を立てる。指導計画は子どもの思考過程に沿った課題を設定することから始まり、単元全体を見通して、子どもの疑問や興味・関心を把握し、課題につながる具体的な資料を準備する。提示する資料は、地域の実態に即したもので、比較できるもの、五感に訴えるもの、などから選ばれる。その選択の基準は、課題追究につながることである。突き詰めるというのは、別名、追究することである。子どもたちの思考を刺激し、考え始めるような資料を選び、疑問や問いを持たせ、考え始めるとともに、一つの考えに固定化しないように、子どもの思考をゆさぶるのである。

2組の11/16時間の授業は、教師が準備した実物資料を通して、子どもたちはコンビニエンスストアの品物とスーパーの品物の値段を比べることから‘コンビニの方が高い値段なのに、なぜ利用するのだろうか’という課題を設定する。子どもたちは、前時の学習(店や商店などの調査、あるいは、活動を通して店の特徴を調べる過程)から、‘なぜだろう’という課題に対する予想を生み出すことができる。

資料1 単元「わたしたちのくらしとはたらく人々の指導計画

次	指導計画	評価				評価方法	
		関	思	表	知		
一 導入 (2)	買い物調べ ②	○	○			・家族の買い物について、意欲的に調べることができる。 ・買い物調べから、同じ品物でも買う店が違うことに疑問をもつことができる。	ノート 発表
二 スーパーマーケット (7)	スーパーマーケットの見学 ②	○		○		・見学して、調べる内容や調べる方法について考えることができる。 ・意欲的に観察したり、店の人にインタビューしたりすることができる。	調べカード ノート 行動
	店の工夫を考える ③			◎	○	・見学したことをもとに、資料をわかりやすく表現することができる。 ・見学を通して、働く人の工夫や努力について理解することができる。 ・お客さんの立場にたった店づくりがおこなわれていることに気づくことができる。	調べカード ノート 発表
	買い物に来る人はどこから ①				○	・お客さんは、よい品物をより安く安全に求めようとしていることがわかる。	発表
	品物はどこから ①				○	・野菜や果物がどこから運られているのか調べ、他地域とのつながりに気づくことができる。	ノート 発表
三 商店街調べ (5)	コンビニエンスストア調べ (本時2/2) ②		○		◎	・自分たちのくらしと商店とのつながり、客のニーズに対応した販売の工夫が理解できる。 ・調べたことを、友だちに分かるように発表することができる。	ノート 発表
	商店街調べ③	○			○	・見学の計画を立てる。 ・様々な商店に関心をもち、販売の特徴をとらえることができる。 ・調べたことをもとに、店側の工夫・努力について考えることができる。	ノート 発表
四 まとめる (2)	買い物物の工夫調べ ②	○	○			・家の人の買い物物の工夫を調べることができる。 ・家の人が品物の品質や安全性、便利さなどを考えて品物や店を選んでいることがわかる。	発表

資料2

学習過程	学習活動および予想される児童の反応等	指導上の留意点	評価規程及び方法
事象提示	1. コンビニエンスストアの品物と、スーパーの品物の値段を比べる	・資料提示（実物）	
課題設定	2. 課題を設定する。 スーパーマーケットより、ねだんが高いのにはコンビニエンスストアを利用するのは、なぜだろう	・コンビニエンスストアの方が値段が高いことから設定する	
予想	3. 自分の考えを出し合う ・いろいろなものを売っている ・24時間あいている ・弁当の種類が多い ・子どもでも行ける ・家の近くにある ・コピーができる ・宅配便がある ・学校や仕事の帰りに寄れる	・調べたこと、発見したことを友だちに分かるように発表させる	・課題に対して、調べたことを友だちに分かるように発表している。（発表）
つきつめる	4. 予想した意見が本当にお客さんが行く理由になっているかを考え合う ○ 本当にいるんなものを売っているのか ・すぐに食べられるものが売られている ・お客さんが歌しがるものがある ・買いたいものが買える ・お客さんが歌しいものは何かを調べている ・品物がなくならないように、店の人が気をつけて並べている ○よく利用する人はどんな人だろうか ・お母さんがいぬいときに、お弁当を買っている ・中学生や高校生が食べるものを買っている ・お父さんが、お弁当や雑誌などを買っている ○どうして値段が高くても買い物に行くのか ・すぐに食べられるものが置いてある ・少ない量のものも売っていて便利 ・家の近くで、いつでも開いている ・新しいお弁当が、トラックで運ばれて新鮮	・考えや理由を焦点化する ・調べたこと、発見したことから説明させる ・児童の発言を明確にするために、資料（商品）を提示する ・自分の買い物物の経験を出させる	・見つけたことや、経験をもとに、販売の工夫が理解できる。（発表・調査ノート）
まとめ	5. 学習を通して分かったことをまとめる	・ノートにまとめさせる	

「つきつめる」のステップは、そのような子どもたちの予想を確認し、さらに探究して行く過程である。当校で設定している「つきつめる」の全過程は「ひとり調べ-予想の根拠や気づきを出会う-有効な資料提示-切り返し発問やゆげぶり発問」に構成されている。この授業では、前時の授業でなされた調べ活動を基に、教師が提示する資料から課題に対する各自の予想の根拠や気づきと出合う。子どもたちが、調べたこと、発見したことから自分の予想に有効な根拠を提示する際、教師は「なぜだろう」「どうしてだろう」と切り返し発問をする。考えを話し合って共有する過程で、子どもたちはクラス構成員間の考えの違いに気づくようになる。道上小学校では、学習課題にかえったまとめとして「書く」ことを大事にして、子どもたちの気づきを新たな課題発見につなげようとする。

3 第4学年「わたしたちの住んでいる県-わたしたちの県の自然や農業と人々の暮らし」の場合：1組の授業を事例に

(1) 単元のねらいと課題

本第4学年単元「わたしたちの住んでいる県-わたしたちの県の自然や農業と人々の暮らし」は、(平成元(1989)年版)学習指導要領、第3学年及び第4学年の目標(3)「地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。」に関わる。

表2 評価規準

関心・意欲・態度	○広島県の地形や産業、県内の特色ある地域などの様子に関心をもち、それを意欲的に調べることを通して、地域社会の一員として自覚を持つとともに、地域社会に対する誇りと愛情を持つとする。
思考・判断	○広島県の地形や産業、県内の特色ある地域などの様子から学習の問題を見いだして追究・解決し、県の特色や地域の人々の生活や産業と自然環境及び国内の他地域や外国との関連を考え、適切に判断する。
技能・表現	○広島県の地形や産業、県内の特色ある地域などの様子について、資料を活用したり白地図にまとめたりして調べるとともに調べた過程や結果を工夫して表現する。
知識・理解	○「広島県内における自分たちの町の地理的な位置」「県全体の地形や主な生産の概要」「交通網の様子や主な都市の位置」「生産や地形条件から見て特色ある地域の人々の生活」「国内の他地域や外国との関わり」を具体的に理解する。

産業や地形条件を通して県内の特色ある地域の人々の生活を調べるとは、県全体の地形や主な産業の概要を調べる学習との関連を図り、山地や平地にある地域や海にかこまれた地域、伝統的な工業などの地場産業の盛んな地域や近代的な工場が集まっている地域などを取り上げ、そこで産業に携わったり生活したりしている人々の生活の様子を具体的に調べることである。

そのため、道上小学校では広島県の伝統的な工業の一つである福山琴を取り上げている。さらに道上小学校の4年生は琴を中心とした合奏組曲「菅茶山四系の時」に取り組んでいて、使っている琴も福山のものである。福山の琴は全国生産量の約80%を占めているし、道上にも琴を生産している工場がある。それ故、本単元の指導にあたっては福山琴を用いて、子どもたちが興味を持って学習内容を追究していけるようにしている。

本単元のねらいを評価規準で示すと、表2のように、なる。

(2) 単元の計画とその構造

本単元の指導計画は、資料3-1、3-2：単元計画のとおりである。

単元(全20時間)は、①導入(広島県について調べる計画をたてる、1/20)→②わたしたちの県のように(地図帳立体模型地図・白地図などを通して広島県の特徴の調べ、2~5/20)→③わたしたちの県の自然や産業と人々の暮らし(農業・伝統工業・に関する調べ、6~13/20)→④人やものでつながるわたしたちの県(県内と他地域、外国との結びつきの調べ、14~18/20)→⑤まとめる(自分たちの県を紹介するパンフレット作り、19~20/20)、で構成されている。

1組の子どもたちは、「健康な暮らしをささげる」「安全な暮らしを守る」「地域の発展につくした人」の単元で、自分たちで疑問に思ったことを解決するために、地域の人々に取材したり、図書館に行って調べたり、インターネットを活用して調べたりする方法を学んだ。この活動の中で、課題を解決するために何を使って調べればいいのか、だれに聞けばいいのかといった調べ方法が身に付けた。

しかし、調べたことを自分の言葉でクラスの子どもたちに分かりやすく発表したり、表やグラフなどから自分の考えの根拠となるものを提示しながら発表したりすることまでは進んでいない。そのため、本単元は子ども自身が予想を立てたことに対して調べたことを筋道立ててまとめ、クラスの子どもたちに分かるように伝えられるように単元を構成している。

例えば、②わたしたちの県のように(2~5/20)では、広島県の地図や立体地図などを十分に活用して白地図に主な地形や産業、道路や鉄道、都市などを書

資料3 単元「わたしたちの住んでいる県」の指導計画

次	指導計画	評 価				
		関	考	表	知	評価規準 評価方法
一 導入 (1)	広島県について調べる計画を立てる。①	◎				・自分たちの町や県内の他地域の様子について、経験や疑問を出し合い、自分たちの県の様子について調べる計画を立てている。 ノート 発表
二 わたしたちの県のよさ (4)	広島県全体の特徴をつかみ、地形や産業の特色を調べる。④	○	○	◎	◎	・自分たちの住む県や町の地理的位置を調べて、県内の土地の様子に関心をもっている。 ・土地の様子や使われ方と地形との関係、人口と交通の様子との関係について考えている。 ・地図帳や立体模型地図、白地図などを利用して地形や産業などの特色を調べ、ある地点からの方位と距離を用いた表し方で表現している。 ・県内における自分たちの町の地理的位置、県全体の地形や産業の概要、交通網や主な都市の位置が分かっている。 発表 ノート 白地図
8)	農業のさかんないきについて調べる。④	○	◎	◎	◎	・自分たちの住む県でとれる農作物を調べ、県内の農業の様子に関心もち、意欲的に調べている。 ・調べたことをもとに、県の特色を考え、適切に判断している。 ・自分たちの住む県の代表的な農作物について、地図を活用したり、資料を収集・活用したりして具体的に調べている。 ・産業や地形条件から見て、県内の特色ある地域の人々の生活が分かっている。 ノート 発表 白地図 聞き取り メモ
	県内の伝統的な工業製品について調べる計画を立てる。①	○				・県内の伝統的な工業製品やその分布図から、自分たちの住む県でつくられている伝統的な工業製品を調べて、伝統的な工業に関心をもつ。 ノート 発表
	福山琴の生産がさかんなわけを調べる。②(本時2/2)	○		◎	◎	・福山琴について問題意識をもち、学習の見直しをもって追求、解決している。 ・資料を収集、活用して具体的に調べ、調べた過程や結果を分かりやすく表現している。 ・福山琴がさかんにつくられているわけや、その工夫や努力について分かっている。 発表 ノート 聞き取り メモ
	県内の他の伝統的な工業製品について調べる。①			○		・広島県他地域の伝統的な工業製品や産業の様子を調べ、自然と産業とのかかわりについて分かっている。 発表 ノート
五 人やものでつながるわたしたちの県 (5)	県内と他地域、外国との結びつきについて調べる。⑤	○		◎	○	・県内の人々の生活や産業が自然環境及び国内の他地域や外国と関わりをもっていることを考え、適切に判断している。 ・国内の他地域や外国とのかかわりを、地図を活用したり、資料を収集・活用したりして具体的に調べている。 ・人々の生活や産業と国内の他地域や外国とのかかわりが分かっている。 ・我が国や外国には国旗があり、それらを尊重することが大切であることが分かっている。 発表 ノート
六 学習のまとめをする (2)	自分たちの県を紹介するパンフレットをつくる。②	◎		◎	○	・進んで情報を発信・活用していく意欲をもつ。 ・調べた過程や結果を白地図にまとめ、分かりやすく表現している。 ・学習を振り返り、自分たちの生活にかかっている。 パソコン ノート 作品 テスト

資料4

学習過程	学習活動及び予想される児童の反応	指導上の留意点	評価規準及び方法
事象提示	1. 福山琴の生産量を見て、今日の課題を確認する (資料①)	・今日の学習に意欲をもたせる	
課題設定	2. 本時追求する課題を明確にする 福山琴がたくさん作られているのはなぜだろう	・課題を把握させる	
予想	3. 自分の予想を出す ・琴をつくる上手な人がいる ・音や形、飾りなど作るとき、工夫している ・昔から琴を作っていた ・琴をひく有名な人がいて、琴をひく人が多かった	・調べて分かったことを自分の言葉で話し、友だちに分かるように発表させる	
つきつめる	4. 予想に対する根拠を話し合う ○琴を作るときどんな工夫や努力をしているか (資料②) ・製材工程で桐の木が、琴作りの熟練者によってだまかまな形に切られる ・乾燥工程で2～3年雨や風にさらして、木をからし、作ってからの木の「くろい」「そり」をなくしている ・甲造工程では、かんなで形を整え、のみで細かい模様をつけ、こで独特の色をだしている ・装飾工程では、一人の技術者が伝統的な技法を使いながら細かい作業を繰り返している ・仕上げでは、金具をつけたり、最後の検査をしている。 ○いつから琴を作っているのか (資料③④) ・1619年水野勝成が藩主として福山に来たときから始まったと考えられている ・1800年代に神辺町出身葛原勾当がたくさんの弟子に琴を教え、たくさんの方が琴を必要としていた ・1884年牧本長蔵、菅波甚七が琴の生産を始めた ・大正時代まで生田流の琴を作っていたが、日本でたくさん使われている山田流に変えてから生産量が上がった ・牧本正男により、一人の職人が全部を作るのではなく、専門の職人が分かれて作ることで、よい琴が安くたくさん作れるようになった ・1985年(昭和60年)楽器としては初めて、伝統工芸品に選ばれ、福山琴が有名になった	・追求の視点を明確にする ・随時全員に発表し合ったことを確認する ・児童の発言が資料のどこから分かったのかをきちんと説明させる ・分からないことは、必要に応じて説明する	・福山琴の生産の様子から、その工夫や努力について分かっている(発表・ノート) ・資料を収集、活用して具体的に調べ、調べた過程や結果を分かりやすく表現している(発表・聞き取りメモ・ノート)
まとめ	5. 今日の学習をして分かったことをまとめる ・私たちが使っている琴は、昔から細かい作業や努力を通してたくさんに作られている	・ノートにまとめさせる	

き表しながら、広島県の地形や産業などの特色を考えることができるように構成されている。

④わたしたちの県の自然や産業と人々の暮らし(6~13/20)」では、農業や伝統工業の盛んな地域に関する資料を分かりやすい文やグラフ・写真などに準備して、子どもたちが自分の予想をしっかりと確かめ合って根拠を持った発現をさせるように、友だちを説得できる説明の仕方やまとめ方を身に付けるように構成されている。

さらに、④人やものでつながるわたしたちの県(14~18/20)は、交通網や産業、特色ある地域の人々の生活などの学習と関連づけて取り上げたり、結びつきのある外国の位置や世界地図・地図帳などで確認したりして、県の特徴をより広い視野から考えることができるように構成されている。

(4) 本時の指導計画(12/20):「つきつめる」のステップとその役割を中心に

4年1組の12/20時間の授業も、3年の授業と同じく教師が準備した資料を通して授業の課題を確認することから始まる。

教師は「福山琴の生産量」を示している資料を提示する。福山琴が全国生産量の80%を占めている資料を見て、子どもたちは福山琴がたくさん作られていることについて「なぜだろう」と問題意識を持ち、その課題に対する予想を友だちに分かるように自分の言葉で表現する。そして「つきつめる」のステップに沿って自分たちの予想を探究・確認して行く。

子どもたちは前時までの授業を通して「広島県全体の特徴と様子・農業のさかんな地域・県内の伝統的な工業製品」に関する調査を行う。その過程を通じて捉えた自分たちの住む県や町に関する概要や特色を基に、課題に対する予想の根拠を話し合う。

この話し合いの過程では3つの資料が利用される。まず、教師は琴の制作工程に関する資料を提示し、クラスの全員が発表し合うことから琴を作る時の工夫や努力について気づかせる。続いて、琴の生産や利用の歴史に関する資料を提示し、時間的流れやできごとを通して琴がさかんにつくられているわけを考えさせる。

授業における「つきつめる」の過程は主に子どもたちの話し合いで構成され、その中で分からないことがある場合、教師は必要に応じて説明する。3年の授業に比べると第4学年の授業では、教師が子どもに資料のどこから予想の根拠が分かるかをきちんと説明させていることが分かる。自分と他者との意見の違いに気づき、相手にわかるように説明することは、子どもらの考えをより深められる。これは前述した「社会科をはじめ、生活科・総合的な学習の時間を通じて子ども

たちが身に着けることを強調している4つの能力」の中で「②観察・表現する力」「③資料を活用する力」と関係深い。

まとめの部分では、第3学年の授業では「書く」ことを通じて子どもたちの気づきを新たな課題発見につなげようとしたように、当授業も学習をして分かったことをノートにまとめさせることになっている。しかし、単元ごとのまとめを比較してみると、第3学年の単元のある授業と同じく「つきつめる」の過程を繰り返しているが、第4学年は学習内容をもとに自分たちの県を紹介するパンフレットを作る活動で終わらせている。これは、学習を振り返って自分たちの生活に生かすことであると同時に、相手意識をもって自らの思想の筋道が分かるように伝達する力を身につけ情報の発信・活用していく意欲も持たせられる。

4 道上小学校の社会科授業づくりの原理と特質

本稿で取り上げた福山市立道上小学校は、社会科授業を通して一人ひとりの子どもに「①問題をとらえる力、②観察・表現する力、③資料を活用する力、④まとめる・表現する力」の4つの科学的認識能力を育てることに努めている。

そのため、地域単元指導計画段階に学習内容を構造化すると共に「つきつめる」のステップという構造化された方法を用いて、学習指導要領の教育目標を具体的な学習場面で達成しようとしている。

確かに、教師は社会科授業で構成される「つきつめる」の全過程(ひとり調べー予想の根拠や気づきを出会うー有効な資料提示ー切り返し発問やゆざぶり発問)を通して、子どものスキーマが変化する様子を確認することができる。これらの点をうまく利用すると、子どもたちが考え続け、思考を発展していくように授業をしくむことができる。

道上小学校の授業研究は、地域教材・知識の構造図を活用して質の高い授業づくりを行う曙小学校に比べると、実際の学習場面で「つきつめる」のステップという授業方法の構造化を用いてうまく活用していることは評価できる。

しかしながら、指導内容や指導方法の側面で成されている「構造化」は、社会科授業づくりにおける完成型であるとは言いにくい。そのため、本稿に続く第三項では赤坂小学校のケースを分析し、3つの小学校でなされている授業づくりの比較・考察を通じて、現場からの社会科授業の現状を明らかにする。

【参考文献】

- 池野範男・金寶美・福井駿「地域教材と知識の構造図を用いた社会科授業づくり：小学校における社会科授業構成研究（1）」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部，第61巻，2012.
- 上田薫・静岡市立安東小学校編『子どもも人間であることを保証せよ―個に迫る座席表指導案―』明治図書1988.
- 神辺町立（現福山市立）道上小学校，『第13回教育研究発表会資料』1991.
- 神辺町立（現福山市立）道上小学校，『第14回教育研究発表会資料』1992.

神辺町立（現福山市立）道上小学校，『第23回教育研究発表会資料集』2001.

文部科学省『小学校学習指要領解説社会科編』，2008.

武藤文夫『安東小学校の実践に学ぶ―カルテと座席表の22年―』黎明書房，1989.

【謝 辞】

故藤田松太郎先生，宮本美智子先生，瀬尾祐一先生の元校長先生を始め，各先生方のご努力に敬意を表するとともに，道上小学校の学校挙げての研究に参画させていただいたことに御礼申し上げます。（池野範男）